日本磯漁伝統の研究［X］

―磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究―

田邉　悟

要　旨

わが国沿岸のムラ（村）の中には、地先の磯漁場で、アワビなどの貝類、ワカメなどの藻類、タコ、ナマコ、磯魚などの捕採をおこなってきた人々がいる。それが生計の主要な部分をしめ、生業（なりわい）としている人も多い。このような捕採対象物の漁獲方法をみると、地域差があり、同じでないことがわかる。すなわち、見突き漁による村、裸潜水漁による村、その両方の漁法を組みあわせている村や個人などがそれである。本稿であつかう神奈川県三浦市（三崎町）城ヶ島は、見突き漁、すなわち、地元でいう「ボウチョウ」（舫舟）と裸潜水漁の組みあわせによって磯の漁をおこなってきた。本稿はそのモノグラフである。

キーワード

磯漁　イソミ（磯見）漁　見突き漁　ボウチョウ（舫舟）　アワビ　サザエ　磯漁　海村文化　漁撈伝承　海浜生活

目　次

(1) 研究目的（承前）
(2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究
[I] 神奈川県三浦市城ヶ島の「ボウチョウ」（舫舡）
（一） はじめに
（二） 地域の史的背景など
（三） 漁業生産暦と漁法
（四） 農業生産暦と農業
（五） ボウチョウ（漁法）と漁具
（六） その他の漁法と漁具
（七） ボウチョウに関するその他の聞取り
（八） ボウチョウブネ（漁船）と漁具
（九） まとめ

(1)研究目的（承前）

わが国では、アワビやサザエなどの貝類、ワカメ、カジメ、テングサなどの海藻類をはじめとする魚貝藻（魚介）類は、古代から裸潜水漁撈者（海士・海女・蜑人）によって捕採されてきたことはよく知られている。しかし、それ以外に、海浜生活を営む磯漁民（見突き漁民）によっても捕採されてきたのだが、そのことはあまり知られていない。そのため今日まで、裸潜水漁撈者（アマ）による捕採にかかわる漁撈習俗などの調査・研究に関してはかなりの実績がある反面、磯漁民（見突き漁民）の実態は十分に調査・研究されているとはいえない。

したがって、本調査研究は今日までおこなわれてこなかった実態調査による事例研究であり、後日、日本全域における磯漁民の伝統的な暮らしや歴史の全貌を明らかにするための一事例であり一里塚である。研究の目的はそれらの集大成にある。

(2)磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[I]神奈川県三浦市城ヶ島の「ボウチョウ」（舫舮）

（一）はじめに

神奈川県三浦三崎
　国土地理院発行　1：25,000

本調査地は神奈川県の三浦半島南端に位置する三浦市城ヶ島である。この島は対岸の旧三浦市三崎町と約三百メートルほどはなれ、三崎瀬戸によって久しいあいだ島社会を形成してきた。面積はおよそ〇・八平方キロメートル、世帯数二三二世帯、人口六一八人を数える（平成十七年九月一日現在）

昭和三十五年に城ヶ島大橋の開通により、島としての実質的な社会生活は失われたが、すくなくとも近世中期から続いた一島一村の伝統生活の中に地縁、血縁関係で結ばれた社会構造をみることができる。（地図参照）

（二）地域の史的背景など

『皇国地誌』残稿中に、「延宝四年（一六七六）に一村ヲナスト云フ」とみえることや、『城（じょう）むら旧記写』（嘉永六年）の中に「正保年中（一六四四～四七）に和泉国より三人連れの魚商がきて、呑海（どがや）屋長左衛門と星野権兵衛は城村に住み、新明八左衛門は西の浜に居住して小買をはじめ、諸魚を買取り、延宝二年（一六七四）に江戸の新肴場（しんさかなば）へ送ることをはじめた」が、その後、城村に住んでいた星野権兵衛が元文三年（一七三九）に城ヶ島に移り住み、魚商をおこなったとみえる。

このように『皇国地誌』などの記載から、江戸へ鮮魚を送ることによって生業がたてられるようになったこの時代の漁業集落成立とのかかわりを知ることができる。

文化九年（一八一二）頃にまとめられた『三浦古尋録』によれば、「戸数六十九戸、浦賀御奉行支配、高三十三

石五斗一升余」とみえ、石高は「天保郷帳」と同じである。

また、『三浦古尋録』の中に、「此処ノ漁業者ハ当嶋及ヒ諸州エ出テ海底入鮑（アワビ）ヲ取テ作業トス　是ヲ蜑（アマ）丁トモ云泉（ア）郎（マ）ト云々　昔シ此島ニ尉ト云者住故尉ヶ嶋ト云其後城ノ字ニ書改ト云」とみえる。

また、『城むら旧記写』の中に、「城ヶ島へ当初より人渡り住居致し候事は永禄元年なり」（一五五八）とみえる。

さらに、慶安年中（一六四八～五一）に、伊勢からアマが三崎の向ヶ崎に来たが、その後、城ヶ島に渡った（『三崎志』）ともみえる。

なお、城ヶ島における「地域の史的背景」に関する詳細については別稿を参照されたい。[注(1)] ここでは、「城ヶ島における人口の変遷」及び「戸数・世帯数の変遷」に関して一覧表を付すことにとどめた。

（三）漁業生産暦と漁法

城ヶ島における漁業生産は多種多様である。また、時代により捕採対象となる魚種も変化し、それにあわせて漁法も旧廃漁法にかかわるものなどあり、きわめて複雑である。

一般的にいえることは、三浦三崎の漁民が釣漁業を伝統的におこなってきたのに対して、城ヶ島の漁民は網漁業が伝統的で、ほとんど釣漁業をおこなってこなかったことが特徴的である。

また、裸潜水漁（モグリ・海士）がさかんであると共に舫舫（ボウチョウ・見突き漁）がさかんで、夏季のモグリ漁と冬季のボウチョウの組みあわせが一年間の漁業生産の基本となっていた。

城ヶ島における人口の変遷

年	度	男　性	女　性	合　計	備　考
1781	天明　元年	176人	168人	344人	戸籍調査68戸
1848	嘉永　元年	197	195	392	大田和・浅葉宏家文書
1873	明治　6年	228	216	444	11月壬申戸籍78戸
1876	明治　9年	229	224	453	戸数78、皇国地誌村誌による
1881	明治14年	233	222	455	年令区分表、市役所文書
1886	明治19年	227	212	439	三崎町地誌83戸
1887	明治20年	227	228	455	戸口調査88戸
1900	明治33年	——	——	523	戸数88戸、町勢要項郡役所
1911	明治44年	——	——	475	戸数91戸、沿岸漁業90年誌458 p
1916	大正　5年	306	249	555	トラホーム治療施行戸別検診簿
1920	大正　9年	不明	不明	不明	戸数 101戸
1933	昭和　8年	335	284	619	区勢調査 117戸世帯数同
1950	昭和25年	418	392	810	152戸、国勢調査（10月1日）
1955	昭和30年	469	452	921	1月1日現在　188世帯
〃	〃	464	421	885	国勢調査（10月1日）170世帯
1956	昭和31年	464	425	889	172世帯　1月1日現在
1957	昭和32年	472	424	896	173世帯　1月1日現在
1958	昭和33年	480	429	909	176世帯　1月1日現在
1959	昭和34年	489	433	922	180世帯　1月1日現在
1960	昭和35年	602	529	1131	182世帯　1月1日現在
〃	〃	463	437	900	国勢調査（10月1日）165世帯
1961	昭和36年	460	437	897	165世帯　1月1日現在
1962	昭和37年	474	447	919	172世帯　1月1日現在
1963	昭和38年	478	456	934	三浦市統計表　175世帯
1964	昭和39年	483	469	952	176世帯　1月1日現在
1965	昭和40年	495	483	978	178世帯　1月1日現在
1970	昭和45年	502	492	994	国勢調査（10月1日）220世帯

拙稿「城ヶ島漁村の成立過程と人口の変遷に関する歴史的考察」1968年より作成した。

城ヶ島における戸数及び世帯数の変遷

年	度	戸数	世帯数	備考
1781	天明　元年	68		戸口調査
1812	文化　9年	69		三浦古尋録
1848	嘉永　元年	70		大田和・浅葉宏家文書
1873	明治　6年	78		壬申戸籍
1876	明治　9年	78		皇国地誌村誌
1881	明治14年	83		年令区分表、市役所文書
1886	明治19年	83		三崎町地誌
1887	明治20年	88		戸口調査
1900	明治33年	88		郡役所町勢要項
1906	明治39年	90		三浦三崎名所の栞、高橋屋出版
1911	明治44年	91		沿岸漁業90年誌457 p
1916	大正　5年	101		トラホーム治療施行、戸別検診簿
1920	大正　9年	不明	不明	第1回国勢調査
1933	昭和　8年	117	117	区勢調査
1950	昭和25年	152	152	国勢調査（10月1日）
1955	昭和30年		188	1月1日現在
〃	〃		170	国勢調査（10月1日）
1956	昭和31年		172	
1957	昭和32年		173	
1958	昭和33年		176	
1959	昭和34年		180	
1960	昭和35年		182	1月1日現在
〃	〃		165	国勢調査（10月1日）
1961	昭和36年		165	
1962	昭和37年		172	
1963	昭和38年		175	
1964	昭和39年		176	
1965	昭和40年		178	
1970	昭和45年		220	国勢調査（10月1日）

拙稿「城ヶ島漁村の成立過程と人口の変遷に関する歴史的考察」1968年より作成した。

ボウチョウは、潮が澄んで海中、海底がよく見通せる秋から冬の季節におこなわれるのが普通だが、年間を通しておこなってきた島民もいる。

地元の三崎や城ヶ島地域ではボウチョウを「舫舮」と表記してきた。

船上より海中、海底を見定め、長い棹（竿）の先につけた各種の漁具で、アワビ、サザエの貝類をはじめ、ワカメ、カジメ、テングサなどの海藻類、磯魚やタコ、ウニ、ナマコなども捕採する。

生産暦を表に示した青木広吉氏によれば、十月初旬よりボウチョウをはじめ、翌年の四月いっぱい頃までおこなったという。

城ヶ島における「モグリ」は、男性（海士）による裸潜水漁の代名詞のようなもので、この地域では女性（海女）による裸潜水漁はおこなわれていない。モグリの漁期は五月初旬より九月二十八日頃までで、捕採対象物はアワビ、サザエなどが主なものである。また、ボウチョウは三崎瀬戸でおこなうことも多く、コチ、タナゴ、ヒラメも多かった。

イカ釣りは「ヤリイカ」や「コーイカ」釣りで、一月から三月いっぱいまでの冬の三ヶ月間が漁期である。

カツオ流し網は、夏季のモグリ漁が終った後からはじまり、十二月下旬までおこなわれてきた。したがって、この流し網では、いわゆる「戻りガツオ」を漁獲するほか、イナダ、ウズワ、メジなども漁獲された。

マグロ流し網は、キハダマグロを主に漁獲するための流し網で、春先の三月初旬より五月いっぱいまでつづけられた。それ以後、特に六月十日頃の漁を「入梅マグロ」といい、その時期は漁も多く、毎年出漁した。

サンマ流し網は十月初旬にはじまり、十二月いっぱいまでおこなわれてきた。年によっては一月初旬まで続けら

れることもあったが、一月になると漁獲されるサンマは小振りになった。

コザラシ網は、イワシを漁獲するための流し網である。漁期は二月初旬の寒い季節にはじまり、五月いっぱいおこなわれてきた。

アジ巻網はマアジやムロアジを漁獲する網である。九月の二十日頃にはじまり、十二月いっぱいが漁期だが、漁獲さえあれば、翌年の一月から三月頃まで続けられる年もあった。

テグリ網ではアマダイ、ヒラメなどが主に漁獲されてきた。主な漁期は二月初旬より五月下旬までの四ヶ月間であった。

ボーウケ網（棒受網）はマアジやムロアジを漁獲するためにおこなわれた。漁期は九月下旬頃になるとはじめられ、十一月いっぱいぐらいまでつづけられたが、漁獲さえあれば、それ以後も十二月いっぱいはおこなわれた。

エビ網は「磯立網」とも呼ばれる。イセエビを主な漁獲対象としているための名称であるが、この網には磯魚はもとより、サザエなど夜間によく移動する魚貝（介）類がなんでもかかった。漁期は年中だが、イセエビの産卵期である六月、七月の二ヶ月間は禁漁となっている。この禁漁期間は今日では全国的に同じである。

ナナメ網（七目網）はヒラメを専門に漁獲するための刺網なので「ヒラメ網」とも呼ばれている。漁期は毎年三月三日の節供の日にはじまり四月いっぱいおこなわれる。

ハダテ網は岡（陸地）の近くに張立てる刺網で、漁獲対象魚はカマス、イナダ、ソウダガツオ、コイウオ（ソウダガツオの小さなもの）、コノシロ、ムツ、ヒラメなど多種類におよんだ。時にはタコがかかることもあったという。漁期は十月初旬頃から翌年の四月下旬頃まで、秋から春まで。

神奈川県三浦市城ヶ島の漁業生産暦（新暦）

青木　広吉氏聞書
（明治21年９月10日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘　要
ボウチョウ	―	―	―	―	―					―	―	―	舫釘・アワビ・サザエ磯漁
モ　グ　リ					―	―	―	―	―				裸潜り・男のみ・5月諸磯へ・アワビ・サザエ
イ　カ　釣	―	―	―	―									ヤリイカ・コータイカ
カツオ流し網									―	―	―	―	カツナガシ・モグリが終わってから・カツオ・イナダ・ウズワ・メジ
マグロ流し網			―	―	―	―							キハダマグロ
サンマ流し網	―									―	―	―	正月にも時々操業サンマは小さくなる
コザラシ網		―	―	―	―	―							イワシ流し網・イワシ
アジ巻網	―	―	―	―					―	―	―	―	マアジ・ムロアジ・漁があれば翌年3月頃まで
テグリ網		―	―	―	―	―							アマダイ・ヒラメ
ボーウケ網									―	―	―	―	棒受網・アジ・ムロアジ・漁があれば12月も
エ　ビ　網	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	磯立網・イセエビ磯漁・6月～7月産卵禁漁
ナナメ網			―	―	―								七日網・ヒラメ網ヒラメ・3月3日より
ハダテ網	―	―	―	―	―					―	―	―	カマス・イナダ・ソウダガツオ・ウズワ
ゴ　ト　網	―	―	―	―	―					―	―	―	スズキ・コノシロ・ヤリイカ

（昭和45年１月31日調査）

神奈川県三浦市城ヶ島の漁業生産暦（新暦）

池田　与七氏聞書
（大正14年６月13日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘　要
ボウチョウ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	アワビ・サザエ・磯漁
モ　グ　リ						―	―	―	―	―			アワビ・サザエ・ウニ・トコブシ
エ　ビ　網	―	―	―	―	―	―		―	―	―	―	―	イセエビ磯漁

（平成15年２月18日調査）

ゴト網は「マス網」とも呼んだ。「桝」のような四角い型の網を袋部分に張り立てることによる呼び名である。もともとはヤリイカを漁獲するために導入されたが、スズキ、コノシロなども漁獲できた。漁期は十月初旬より翌年の四月いっぱいまでであった。

上述したように城ヶ島では、夏季の漁としてはモグリによるアワビ採取がさかんであったため、夏季には網漁をおこなうことはほとんどなかった。

このように城ヶ島における漁業生産は漁獲対象となる魚種が多く、漁法も多種多様である。

また、島民の漁業生産をみても個人差が大きい。それ故、まったく個人的に特定の漁獲物を対象にしてきた漁業生産もありうる。それは、漁業が個人的な小漁業資本による家族経営にささえられていることが多いことの結果で、個人的な「イエ単位」の漁業による個人所有の網漁もある。

また、それとは別に、各種の網漁に代表されるように数軒の、あるいは十数軒の家が共同出資して網組を組織しての経営によるアジ巻網などの網組もあり多様である。

次に、一年間の漁業生産でも城ヶ島において典型的ともいえる漁業生産暦の事例をあげてみる。

表に示したように、池田与七氏からの聞書による漁業生産暦をみると、ボウチョウは一年を通しておこなっているが、夏季はモグリをおこない、六月初旬から九月いっぱい、おそくても十月中旬頃まではモグリが主力となる。

捕採対象物は、ボウチョウではアワビ、サザエ、磯魚各種など。モグリによる捕採対象物はアワビ、サザエ、トコブシなどである。しかし、昭和の初期頃は、サザエやトコブシは自家消費用で商品にはなりえなかったと聞いた。

この他、一年をとおして六月、七月の二ヶ月間のイセエビの産卵期にあわせたエビ網の禁漁期間をのぞいては、エビ網（磯立網）漁により、イセエビをはじめ磯魚などの捕採をおこなうという、ごく単純な漁業生産の組みあわせにより、生業をなりたたせてきた島の人々もまた多いのである。

（四）農業生産暦と農業

城ヶ島においては農業といえるほどのものではないが、島の台地上の耕地で自給的な畑作をわずかばかりおこなってきた。水田はない。

明治時代か大正時代、あるいは昭和期にはいってからのことか明確でないが、三崎（城村）に耕地を所有する家があり、麦が実った頃になると、漁船に麦（穂のついたままのもの）を積んで運んでいるのを見かけたものだという話しを聞いたことがある。城ヶ島の人々の先祖は、もとは城村から移り住んだ人達なので「城の島」の名が付いたという話しもあることからすれば、城村にも土地（畑）があり、収穫した麦の穂を城ヶ島に船で運び、脱穀、調整したということは当然であろう。

台地の農業も砲台ができるようになった江戸時代の末期から明治時代に移るにしたがって耕作地の制限がくわわ

り、以後、第二次世界大戦が終るまで、あまりこのましくなかったという。

明治八年の調査による『皇国地誌』の中にみられるように、当時は「男ハ漁猟ヲ以テ生計トシ、女ハ専ヲ耕作ヲ業トス」とされ、それ以前より畑仕事は女の仕事というように分業化されて、男はあまり畑仕事をすることがなかったという。このことは、昭和四十年代まであまり変わっていない。

この時代の農作物などについては『皇国地誌』の中に、地味は「墟土居多間壤土ヲ雑エ其色赤黒、其質中等菽(まめ)麦及栗稗蕃薯(ばんしょ)等ニ宜シク桑茶ニ適セズ。水旱ノ憂少シト雖時々海風潮水ヲ捲キ飛沫土モヲ湿ホスヲ以テ概スルニ収穫甚少シ」と記されている。(菽は豆類の総称・蕃薯は「蕃諸」でサツマイモの別称)

明治十四年の城ヶ島における麦作概纂を当時の三浦郡長小川茂周あてに提出した資料によれば、「平年収穫麦拾弐石六斗五升」　此反別十一町五反　一反につき一石一斗

一、収穫　十三石八斗八升七合五分

此反別十三町五反

一反に付一石二斗七合六分

一石二斗三升七合　平年より増

内訳　大麦　六石五斗六升

此反別四町

一反に付一石六斗四升

小麦　二石六斗七升
此反別三町
一反に付八斗九升
裸麦　四石六斗五升七合五分
此反別四町五反
一反に付三石三升五合

とみえる。このことからも、水田のない城ヶ島では畑の麦作りが主なものであったことがわかる。

城ヶ島における農業は、農業生産暦の一覧表を作成するほど、その内容は豊富でない。麦のほかには大根、サツマイモ（蕃薯）、ソラマメ、落花生、サトイモ、大豆、小豆やその他自家消費用の野菜類をわずかばかり栽培していた程度である。

麦は大麦、小麦ともに昭和四十年代にはほとんど作らなくなったという。麦作りは、十月頃に種蒔き、翌年六月に麦刈りがおこなわれた。麦はカマで刈りながら、その場に干した。一軒の家で七俵から八俵の収穫があったが殻をとりのぞくと三俵ないし四俵になってしまった。脱穀作業にはムギブチスが用いられた。

大根はおもに自家製のタクアンヅケにした。漁に出る時の御数に一本ごと持って行くことが多かった。一日ですべて食べつくしてしまうというわけではない。

サツマイモ（蕃薯）は、潮風のため、葉がいたんでしまうことが多かったので、作る時に藁をのせ、笹でおおっておいた。サツマイモは副食として大切なものだった。

ソラマメは麦と一緒の十月頃に蒔く。収穫の多い時は三崎の町中へ売りに出かけた。城ヶ島のソラマメは美味だといって人気があったという。もと三浦市長の野上義一さんは、「城ヶ島のソラマメが美味なのは、潮風によって豆の中味まで潮（塩）がしみ込んでいるためで、茹（う）でる時に塩はいらない」などと冗談事に云っていたのを思い出す。ソラマメを三崎へ売りに出かけたのは、昭和三十五年に城ヶ島大橋がかかる頃までつづいた。

その他、大豆、小豆、落花生、胡麻なども作った。

また、『新編相模国風土記稿』によれば、「此地水仙花多し　花重辨にして莖長」と城ヶ島の項にみえる。このように江戸時代から八重の水仙が自生していたことから、水仙も切り花として売り出されていたであろう。

（五）ボウチョウ（漁法）と漁具

城ヶ島では見突き漁のことを「ボウチョウ」（ボウチョー・舫舮）と呼ぶが、明治十一年の「入漁示談為取換証」の漁則の文書の中には「菱突（ひしつき）」と記されていることもある。だが島民は調査当時、「ヒシツキ」と呼んではいなかった。

ボウチョウは「ボウチョウブネ」と呼ばれる小型の木造和船の上から海中、海底の捕採対象である貝類、藻類、

魚類などを見定め、棹（竿）の先に付けた「コゾ」と呼ばれる鉄製カギ型の漁具でアワビを岩礁から起して捕採したり、同じく長い棹の先に付けた「ササエブシ」とよばれる四本ヅメの漁具でサザエをはさみこんで捕採したりするような漁法をいう。明治二十年代以降は「メガネ」が使われるようになり、作業能率が向上した。それ以前は素眼で海中、海底の魚貝藻（魚介）類を捕採したので高度な熟練と勘を必要とした。

「ボウチョウ」は一年をとおしておこなわれることもあるが、普通は夏季のモグリ漁が九月で終ったあとの十月初旬からはじめられ、潮が澄んでいる翌年の四月下旬頃まで続けられる。

以下、ボウチョウで使用する漁具を捕採対象物別にみていく。また、「ボウチョウブネ」（舫舟船）については後述する。

アワビ採取をおこなう時に用いる鉄製のカギを「コゾ」と呼んでいる。深い場所の大きな個体のアワビを岩礁から突き剝がすときには重量のある大型のコゾが必要になる。特に大きなコゾを「オオコゾ」（大コゾ）と呼んでいる。深い場所ではカシの棒（棹・竿）を三本も付けたすことがあるという。棒一本の長さは約二間（三メートル）。

コゾで突き剝がしたアワビは裏返しになる。そのため、ボウチョウによってアワビ採取をおこなうには、コゾでアワビを裏返しにしてから、アワビを海底から船上まで引き上げなければならない。この時に用いるのが「スイツケイシ」で、海底のアワビをすいつけて引きあげるための漁具（道具）である。

ボウチョウでアワビ採取をおこなう時、このスイツケイシをアワビを剝がす前に、アワビの近くに細紐に結んで

おろしておき、それからアワビをコゾで突き剝がす。裏返したアワビに「ヒモ」で吊したスイツケ石をつければ、アワビは簡単に引きあげられ、アワビに傷がつかない。

昔（年代不明）は「自然石」を使っていたが、その後、屋根ガワラの不用になったものに横木をそえたものが使われ、調査当時には「鉄板」、「鉛板」または「セメント」製でレンガ状に形をつくり、ヒモを通すように針金を曲げて埋め込んだものなどが使用されていたが「スイツケ石」の名前は生きている。「鉛板」は海底にとどくのが速いので使いやすいと聞いた。

サザエを採取するためには「サザエブシ」と呼ばれる漁具が使われる。サザエブシは鉄製の先端が四本に分かれたツメをもつ道具で、海底のアワビをツメの間にはさみ込むように工夫されている。したがって、鉄製の棒があまり太いと弾力がなく、サザエをはさみ込めないので細い。太さは直径約〇・二～三センチ。

明治期のサザエブシは四本の鉄棒をまとめ、先端部分が開くような形で鉄棒を紐で縛ったものであったが、その後、鍛冶屋で溶接によって鉄棒を固定されたものが一般に使われるようになった。実測したサザエブシの先端の開いた部分横幅は四センチ、鉄棒の叉までの長さ十六センチ、樫材の棒(稈)にそえてある鉄の部分二十二センチであった。

海藻類のうちでもワカメ、カジメなどを刈り取るためには「カマ」が用いられる。いずれも、「ワカメガマ」、「カジメガマ」の名もあるがあまり区別していない。ワカメ採取用よりもカジメ採取用のカマの方がやや大きいものもある。

カマの刃の長さは普通で約二十五センチ。鯨尺の七寸が普通と昔（明治・大正の頃）はいわれた。八寸のものがいちばん大きい。深い場所で使用するには大きいものが必要になる。調査当時はカジメを採取することはなく、「カジメックイ」と呼ばれるカジメを飼にしてついている巻貝を「タマ」（タモ）を使って採取するだけである。（後述）。

カジメガマを使ってワカメ採取もおこなうが、あとは「シタソウジ」といって、テングサがよく繁茂するように岩礁の海藻を刈り取る作業もこのカマを用いておこなってきた。このシタソウジは毎年一回ないし二回、漁業協同組合の組合員全体で一斉に作業を実施してきた。年により、それもできないときは舫舡専門の者に依頼し、組合から日当をだしてシタソウジ（下掃除）をしてもらった。

第二次世界大戦中の頃など、カジメをさかんに採取していた時代には「ヒキガマ」と呼ばれる大型のカマ（刃の部分約一メートル）に網袋を付け海底を曳いてカジメの採取をおこなったことがあった。（横須賀市人文博物館に収蔵資料あり。）

テングサを採取するための漁具を「ヒッカキ」という。櫛状の鉄具だが三種類の大きさに分類される。この種類は型状についての分類ではなく、櫛の歯にあたる部分の間隔の大きさが荒いか、こまかいかによるだけである。四月頃、口明けの時期に使用するヒッカキの歯は間隔が大きく荒い。口明け当時はそれでもよく採取できるが、だんだんテングサがなくなるにしたがい中型、さらには歯のこまかいものが使用される。

このヒッカキはボウチョウによりおこなわれるものであるから竹棹の先端に鉄の櫛は取りつけられる。このヒッ

カキは天保九年に七十四歳で死去した島内在住の石橋弥市郎が考案したものと伝えられている。

ヒッカキを実測した大きさは、櫛部分の横幅十三センチ、高さ七センチで、中央部分に長さ二十センチの腕が付けられており、この腕の部分を柄（棹）に縛りつけて固定する。

海中、海底の魚類、タコ、ナマコなどを突き刺すために「フシ」が用いられる。フシには四本、五本、六本のものがあり、磯魚の大きさにあわせて使いわける。フシは横に一列に並んでおり内側にイカシが付けられている。フシの中には「バラブシ」と呼ばれる大型のフシがある。普通は三本だが、付け根にあたる部分で一本ずつ分かれており、使用する際に、バラバラになっている三本をまとめて縛り三本のフシに仕上げて使用する。バラブシの名は、バラすことができるという意味から付けられた名称であろう。バラブシは千葉県の安房郡根本方面へ出稼ぎに出る時などに大型の魚類を突くために用いたという。四本のバラブシもある。

実測したバラブシは、先端の横幅部分十五センチ。三本のフシで、中央部分の一本は長さが五十五センチほどある。左右から各一本づつ、約三十センチのフシの一部分をそえて根元を結く。（写真参照）

なお、城ヶ島では「フシ」と「クシ」とは同じだが、「モリ」とは区別している。モリは紐がついていて先端部分がはずれる種類のものや手からはなして使用するものをいい、フシやクシは手に持って使用し、はなすことはないとする。

タモ網（掬い網）は「タマ」と呼ばれる。ボウチョウで使用されるタマは、おもに冬季、船上よりメガネ（ハコ

メガネ・ノゾキメガネともいう）で海中、海底をのぞくがその際にカジメについているカジメボラ（カジメックイともいう）を掬い、採取するために使用する（前掲）。

カジメボラとは海藻（カジメ）を飼にしている直径約二センチほどの小さな巻貝で、冬になるとカジメの葉の上に付いていることが多いため、それを船上よりメガネでみとどけ、タマを使って船上から掬って採取する。

昭和二十年以前、カジメボラは自家消費の食用にするだけで商品にならなかったが、最近（調査当時）になってかなり売れるようになり、年寄りの仕事として、けっこうおこなわれるようになった。水深三メートルから四メートルの深さにあるカジメボラを採取するため棹（竿）は長く、四メートル五十センチほどのマダケ（苦竹）をタマに付けた。

タマのカテ（枠のことをいう）は銅の太いハリガネを使う。楕円形のカテは長径で約十二センチ。袋網の長さ（深さ）約十五センチだが、カテの形が丸型のものもあり、使用するものにより個人差がある。

調査当時、タマの大型のもののカテ（枠）は針金の太いものや鉄製のものを使用するのが一般的になっていたが、針金が入手しにくい頃には自然木の枝も活用していた。松や杉材もあったが、カヤの木のカテが左右に枝が「対生」しているので自製するのによかった。

ボウチョウに使用する漁具に必要な竹材は城ヶ島に自生していない。したがって竹棹（竿）に用いる竹は、三崎、南下浦、北下浦、初声方面の農家へ買いに出かけた。普通は天候が悪く、漁に出かけられない日に歩いて出かけた。秋口になって出かけて切り、タメテ（焚火であぶりまっすぐに直し）、煙の多い場所（天井など）において枯るま

で待つのが普通。

ボウチョウで使用する「メガネ」は「ハコメガネ」とも呼ばれる。明治二十年以前にメガネはなかったので、魚の油や菜種油を海面にたらして海中、海底のようすをうかがった。また、ヌカをまいて漣（さざなみ）をなくしたこともあったという。

ハコメガネが使用されるようになり、城ヶ島では「城（じょう）の桶屋」（昔、城村（じょうむら）にあった）へ出かけてハコメガネをつくった。

最初の頃のハコメガネは名称のとおり箱型だったが、のちに円柱型の今日使われているのと同じ型のものに変わった。（写真参照）

ハコメガネの材質には「サワラ木」が良いとされる。サワラは水をすわないので長時間使用していても重くならない。しかし、最近はサワラが入手できないと杉材を使うこともある。メガネの大きさは使用者の顔にあわせて製作することもあるので、個人差があるが、実測したメガネ（写真）は高さが三十三センチ。

また、城ヶ島で使用しているメガネは口でくわえるようにできており、横木に松材が使われている。したがって、ボウチョウをおこなってメガネを口でくわえると、波のために歯をいためてしまう漁民が多かった。多かったというより、ボウチョウをおこなう漁民はすべて歯が悪い。

メガネが顔にあたる部分には、顔の形にあわせて、まわりから木枠がとりつけられている。この木枠は陽光がメガネの中にさし込むと、ガラスに反射し、光って水中が覗（のぞ）きにくいため、顔の当たる部分以外はできるだけ暗くし

てあった方が使用しやすいように工夫してある。

内海延吉著の『海鳥のなげき』の中に、ボウチョウに使用する「クシ」や「メガネ」に関する記載があるので引用しておく。

「今日ボウチョウ漁に使っているクシは、明治になってどう変わって来たのだろうか。何の改良進歩もなかったようなこの一本の漁具にも、実は先人の苦心の跡が残っている。明治初年にはクシは三本の金を一本ずつ元木に突きさし、それが抜けないように麻糸でかたくしばり、これを竹の先に挿入してしばる。元木は五寸から一尺五寸の長さがあった。それが明治二十五年頃鍛冶屋で今使っているような四本一連のクシを打つようになった。

このクシ一本にも性能の良否があった。ナイケン（工合）がよいのは古鎌をネッて（鍛直し）造ったもの、新しい鉄だと折れたり、曲ったりするが、古鎌で造ったクシは弾力性があり使いよかったという。

ボウチョウの方法も変わって来た。目鏡使用前は米ぬかを口にふくみ、海面にプープー吹きかけると、ぬかの脂肪分がチリメンじわの風波を消して底を見よくなった。これが後フグやサメの肝の油を竹筒に入れて置き、箸でそれを垂らして風波を消すように変った。この時代には魚を見るということに海面の障害があったばかりでなく、光の屈折の原理によって、目に入るのは魚の虚像であり、実像は見える位置にいるのではないから、これにクシを当てるのは、数多くの経験によって悟り得たカンによるほかはなく、容易に誰でもができる技ではなかった。ボウチョウ漁が三崎町の漁師の一部に限られた理由はそこにあった。

この箱目鏡にもいろいろ変遷があった。最初は円形のセーロ（蒸籠）の底にガラスをはめたもので、セーロ屋が売り出した。これは軽くて波に動いて見にくかったので、四分板で底辺一尺四方、上方はやや寸づまりの箱を造り、

ガラスを張って松やにでアカドメをした。これは終日くわえていると、松やにが臭くて堪えられないので、アカ止めに紙をつめて売り出したのが大工の宮川長五郎氏（後の県会議員三崎町長三崎港産みの親となった時代の先覚者）。この四角型は水の抵抗があって使い難かったので、桶屋がヨーバチ（魚鉢型・楕円型）のものを造り、それが今日の円形となった。これを初めカガミといい、後に箱目鏡とよぶようになって、最初の箱型の名残りをとどめている。

三崎で初めてボウチョウに目鏡を使ったのが明治二十年である。その時ガラスを通して初めて海底を見た時の驚きを、二町谷海外（ふたまちやかいと）の半五郎丸故石井喜太郎翁は、生前私にこう語った。〈舟に持っていってのぞくと、何ント、海の底が陸の通りにメエるじゃねえか。舟をガッパンコ、ガッパンコ、カーブラかして（揺って）みても矢ッ張り変ンねェ。全く不思議なもんだったなァ〉。

この箱目鏡の大きな効果は、水中に目鏡を入れるために魚の実像を水中で捉える—従前の水面から空気中に出る反射光線屈折の原理の支配から逃れることができたことである。この目鏡の使用からボウチョウ漁は広く行われるようになった。目鏡の口に渡してある横木を咬えて、身をさかさまに終日浮力と波の動揺に逆らって目鏡の底面を水中に押しつける首の力、—これだけでも骨の折れる仕事である。その何年も何十年もの労苦の跡が、歯の当った部分だけ削ったように横木に残っている[注(2)]」。

明治37年城ヶ島の漁業

No.	漁業の名称	漁船数	総人員	漁獲物三ケ年平均金額	備考
1	七目網	25	75	2,250円	壱艘ニ付三人乗
2	イナダ建網	45	90	1,350	〃　二人乗
3	スズキ建網	20	40	180	前同断
4	ブリ建網	1	2	24	〃
5	ワラサ建網	30	60	720	〃
6	エビ建網	60	120	8,100	〃
7	手繰網	12	24	720	〃
8	蛸壺	2	4	12	〃
9	ボウチョウ	30	45	2,250	壱艘ニ付壱人半
10	壱本釣	60	60	5,400	壱艘ニ付乗組壱人
11	ノベ縄	4	8	12	〃　二人
12	潜水夫	45	45	8,100	〃　一人
13	流シ網	14	84	14,700	流シ網ハ他部落ヨリ雇入ノ者五十六名位コノ給料一ヶ月一名ニ付金8円50銭9ヶ月支払フ一艘ニ付乗組六名
14	小晒網	15	45	2,800	壱艘ニ付乗組三人
15	マキ網	12	36	360	前同断
16	サイロ網	8	16	144	壱艘ニ付乗組員二人（サヨリ網）
17	棒受網	4	28	180	壱艘ニ付乗組七人
18	浮網	5	10	30	〃　二名
19	ハギ網	25	25	375	〃　一名

（六）その他の漁法と漁具

明治三十七年の城ヶ島の漁業は表に示した通り、十九種類にのぼる。したがって本稿では紙幅の関係もあるため表に掲げるにとどめる。なお漁法・漁具に関する内容については『城ヶ島漁撈習俗調査報告書』三浦市教育委員会刊（一九七一年）の中に記載した拙稿を参照していただきたい。

（七）ボウチョウに関するその他の聞取り

これまで城ヶ島調査の結果をまとめた『海辺の暮らし』―城ヶ島民俗誌―[注(3)]によれば、「ボウチョウ漁」について、藤田留吉氏からの聞書調査の結果があるので掲げておく。

「昔はボウチョウは二人で操業した。一人がハサミの間で櫓と櫂を持った。櫓は左手でこぎ、櫂は右手であやつった。同じハサミの間に突き手が座して、海底をのぞいて、魚や貝を捕採した。突き手の指図によって船を移動させることもするが、小さな移動は指図を受けなくとも、突き手の動作で判断しておこなわなければ一人前のトモロシとはいえなかった。船を前進させる場合は櫓を押し、前進をとめる時、及び後進させる時は櫂を使用した。左右へのまわりは櫂でおこなった。突き手が「オサエ、ヒカエ」と指示することもあった。トモドリをつけた操業は、親子、兄弟、などで組むことが多かった。

ボウチョウの漁場は島のまわりと諸磯（もろいそ）から宮川までの地先であった。特に宮川とは入会になっていて、宮川の人は、島のワカメとシイノ実ぐらいはとってもよかったが、売るためにワカメを採取することはできなかった。宮川へはボウチョウ漁のほか、エビ網漁も城ヶ島から入漁できた。アワビ、テングサなど宮川の地先は豊富であった。モグリは毘沙門まで入漁できた。

話者の藤田留吉氏は学校は四年までいき、卒業すると父が病気になってしまったので、漁はおじや兄に見習っておぼえた。あそこえ行けばどんな魚がいるか、自分の頭で覚えなければ独立はできなかった。

ボウチョウ専門の人は体が弱くてモグリの出来ない人で、たいていの人は夏はモグリをやった。モグリは骨は折れるが、漁獲は多かった。だからボウチョウは冬場の漁であった。話者は秋になるとアジ巻き網やカワハギスクイをやった。

カワハギスクイ（ゲバチ袋）は網袋にサザエの餌をつけ、それを海底におろして、カワハギをすくいとる漁法で、深さ三十尋から四十尋の海域でおこなった。時期は十月頃が盛漁期で寒くなると入りがわるくなった。大漁のときは一日に十貫目以上もすくったこともあるが、平均的には五貫ないし六貫というところであった。袋は二つおろし、一つが立ってしまったら他の一つをおろすという工合に交互に袋をあげさげした。一人で操業することが多かった。

ハギスクイの時は船はアンカーをおろした。当時のアンカーは、木製のもので、それに鉄板などをとりつけた、自製のものだった。

昔はボウチョウで魚も突いた。ブダイなどは城ヶ島の表（北側）でもつけた。ブダイの小さいのはビンタといったが、これなど、アジモの中にたくさんいた。ボウチョウでも魚突きの上手な漁師は、フシだけでなくヤスも持っ

ていて、アジモやカジメの中にいる魚を突くのに使った。スズキ、セイゴ、ブダイなどが主なものであった。魚専門にやらない人はフシは持っていたが、モリは持っていなかった。

カジメが生えているところには魚がいる。カジメが生えていないところだと、魚がいたにしても、魚が逃げてしまうので、魚を突くことはむずかしい。

戦争中（太平洋戦争中）、火薬の原料にするといって、上からの命令で、他の商売をしないで、カジメ刈りをやったことがあった。女どもも出てカジメ干しを手伝った。この時、カジメを根こそぎ切ってしまったので、すっかり磯が荒れてしまったことがあった。あまりカジメを切りすぎてしまってもいけない。カジメは古いものは自然とかれて、大きな波に持って行かれてなくなる。そのあとに新芽が出てくる。ボウチョウは、その頃の方がアワビなど採取するにはとりやすい。だけどそのような状態のときは、アワビはすくない。カジメが磯にびっしりと生えそろい、二年ぐらいたつとアワビがついてくる。アワビはカジメなどを食べるので、カジメの少いところではアワビも小さい。カジメのかれる時期は秋の頃である。

明治の末から大正時代にかけて、〈味の素〉の前身である沃度（ようど）会社が、カジメの買い占めをしたとき、城ヶ島でも盛んにカジメ刈りをやったが、モグリをやる人はあまりやらなかった。何といってもモグリの方が稼ぎは大きい。モグリでは石の下でも、カジメの下でも、ボウチョウでは見えないところでもアワビを取ることができるが、船の上からのぞくボウチョウではカジメにかくれて見えない場合が多い。モグリくらい、いい商売はない。

冬から春にかけて夜漁をやったことがあった。ごく昔は山へ行って松の根っこをとってきて、それをこまかく切って、それを燃してあかりにした。それをヒデ松といった。若い頃はカーバイトのガス灯を使った。夜の方が魚の

動きがすくなく、突きやすかった。メジナなどは寒のうちに突けた。深さはせいぜい一ヒロから二ヒロぐらいの浅いところで、深いところはだめであった。

イセエビは、オドシといって、生きたタコを棹の先につけて、エビをおい出してタマに入れてとる漁法があった。昭和の初め頃にはこの漁法は禁止となった。

テングサはヒッカキと呼ぶ櫛状の道具を使った。若い時は大乗寺の近くにあった鍛冶屋で主に作ったが、職人がかわると評判が悪くなり、原（はら）の鍛冶屋で作るようになった。原の鍛冶屋のヒッカキの方が工合がよかった。ヒッカキの善し悪しは櫛の歯の太さにある。あまり太いと調子がよくない。また細すぎても弱くなるので、そのあたりがむずかしいところである。現在（調査当時）商売をしている北条の鍛冶屋は原の鍛冶屋の弟子であった。ヒッカキも昔にくらべるとすこし型はかわっている。

ガラス目鏡は昔と型は同じである。城ヶ島の人は主に城村の桶屋で作った。城村には桶屋が四軒あり、それぞれのなじみに注文して作った。ボウチョウでも、上手な人とそうでない人とは相当の収入における開きができた。ボウチョウでは何といっても眼の良いことが肝要で、それに気転のきく人は漁獲が多かった。モグリの上手な人はボウチョウも上手であるとは限らなかった」。

また、話者の金子庄八氏によれば、「話者は魚をよく突いたのでフシはたくさん今でも持っている。フンドンブシは三本と四本のものがあり、三本のフシの方が通りがよいので、ヒラメ、アンコウ、エイなどを突くのに使った。七貫目もあるエイを突いたことがある。四本のフシではスミイカ、カワハギ、コウタイカなどを突くのに使った。三本ブシには約一貫五百匁の分銅をつけた。漁に行くときにはフンドンブシは二本持って行った。ボラを突くボラ

ブシは海南神社の近くにあった鍛冶屋で作った。房州へ出稼ぎの時にも、このフシを持って行った。ボラブシでも大小はあるが、その使いわけは、深いところでは大きめのフシを使い、浅いところでは小さいフシを用いる。浅いところでは、主にメバル、クロダイ、タナゴなどが突けた。

スズキを突くにはモリを用いた。大きい魚の場合は魚があばれて逃げてしまうことがあるので、モリの方が安全だった。モリは二本（二叉）で銛先も二つあった。埋立て前の城ヶ島の遊ヶ崎あたりの海辺は、冬になるとバラモク（ホンダワラ）で、そこを船をこいで通れない程だった。だからその頃はアラカイ方をまわって通ったものだった。そのバラモクの下にはメバルやタナゴがついた。黒島から現在水産試験場がある前あたりはモバといって、三尋ぐらいのセンパがいっぱい生えていた。それにセイゴやスズキがついていた。年の暮れから正月にかけて、このようなところで大きなスズキが突けた。若い頃、大きなスズキは一本一円ぐらいだった。

ボウチョウでとった魚はキズがあったが、その割に値は良かった。というのは、網でとれる魚は朝水揚げして、その晩の蒸気船に積んで東京へ出荷した。ボウチョウの魚は夕方水揚げして夜の八時頃蒸気船に積むので、魚が新鮮で、キズがあっても値がよかったのだ。それでもキズが大きいと安くなってしまうので、魚を突く時は頭をねらって突かねばならなかった。魚の尾を突くと、魚があばれて、もう一つきしなければならず、キズが大きくなってしまった。こんな魚は商品とはならなかった。夜づきもやったことがある。カーバイトのガス灯をつけて、一尋か二尋のところをのぞいたが、たいしたことはなかった。夜の磯ではアワビやサザエ、イセエビなどは移動する。やがて夜漁は禁止になった。

モク（ホンダワラ）は肥料となったので、採取した。しかし城ヶ島の畑は他の地域に比べるとそう多くないので、モクの採取は他の村を入漁させた。毘沙門、宮川とは入会となっていた。だからモクは毘沙門や宮川から採取にも

きた。そのかわり、毘沙門や宮川でボウチョウ漁ができた」という。

明治三十七年の城ヶ島における魚種・漁法をみると、『三崎町史』（上巻）に、「ボウチョウ」漁船数三十、総人数四十五、漁獲物三ヶ年平均額二、二五〇円とあり、十九の漁業の名称中、平均金額は七目網と並んで六番目である。このことをみると、かなり重要な漁業であったことがわかる。

その「ボウチョウ」の項に「壱艘ニ付壱人半」とみえる。この「壱人半」の「半」というのは「半人前」という意味である。

明治、大正から昭和の初期における「ボウチョウ」漁は二人乗りで出漁するのが普通であった。このとき、「トメ」とか「トメッコ」と呼ばれる弱年労働者（尋常小学校在学中または卒業程度の年齢層のこども）をボウチョウブネに同乗させた。「ボウチョウ」とよばれる漁撈の手助け（作業分担・修行・見習い）をさせるためである。一人前になるまでの見習い期間の仕事のようなものであった。

この種の伝統的な漁撈技術を習得するためには欠かせない修行期間であった。

話者の池田与七氏（大正十四年六月十三日生）によれば、祖父（タツ蔵）の時代から、父（初蔵）と、代々にわたりボウチョウをおこなってきたので、自分も父親の船に「トメ」で二年ほど乗ったという。トメは船の「トモ」で櫓と櫂をあやつり、父親は「ハサミ」のトリカジ側でメガネで海中、海底を覗き見ながら作業をした。この時、ボウチョウに使用する道具は「オモカジ」側に置いてある。

三浦三崎や城ヶ島では一人前の漁民の代分け（給与・分け前）を「ヒトシロ」（一代）といい、半人前は五分、

少々経験をつむと七分・八分というように分け前（給与）に差をつけた。船頭などの役職になると、一人前の漁師以上に一代二分とか一代半というように仕事の役割・内容によって分け前が加算された。これと同じように「壱人半」というのは一人前の漁師と見習いの「トメ」を乗せての漁撈であることを意味している。

「トメ」を乗せて「ボウチョウ」漁に出るときは、トメはボウチョウブネのトモのトリカジ側（進行方向左側）で櫓を押し、櫂をあやつることを「トモ」で「トメ」が一人でおこなうことは上述した通りである。この時、ボウチョウをする者は「ハサミ」のトリカジ側で作業をおこなった。この時、道具はすべてオモカジ側に置くことも前述したとおりである。

これとは別に、一人だけボウチョウブネに乗って「ボウチョウ」（漁）をおこなうことも、ときにはあった。一人でボウチョウをおこなう場合は、二人の時とは別に、「トモ」のオモカジ側（進行方向右側）に座り、一人で櫓と櫂をあやつる。櫂は手で持つだけなので、使用しない時は船上にあげておき、次の作業に移る。この時は棹などの道具類をトリカジ側の「ドドコ」の上に乗せ、作業をしやすいようにする。

話者の池田与七氏によれば、ボウチョウ（漁）に用いるタケ（棹・竿・柄）は、城ヶ島の島内で入手することができなかったので宮田（上宮田・下宮田）や高円坊方面へ切りに行った。九月過ぎになると仲間三人、四人と連れだち、農家をまわって竹を切らせてもらった。この時は土産に魚を持っていったりしたが、宮田方面で一本二十円とか三十円を支払った。昭和年代の終り頃まで竹を買いに出かけていた。その後、城ヶ島に竹を植えた（後述）し、棹は竹材から化学材料（グラスファイバーなど）に変ってきた。

ボウチョウに使用するタケは、十月から十一月頃に切るのが良いという。

若い竹は半年もすると根元から数えて三段か四段ほど枝が生えてくるので、その頃の竹材を選んで切った。古い竹を切って使うと、冬場になって使っているうちに、

「竹がパチ、パチ」とひび割れしてしまうという。また、若い竹材のほうがタメル（まっすぐに直す）のに作業がしやすいと聞いた。

同じボウチョウ（漁）をする場合でも、水深のより深い場所で漁をする人は、コワイ竹（古い竹は長さが長い）を切って使う場合もある。若い人は水深の深い場所で漁をすることが多かったので、長い竹棹を使えば、数をつなげなくてもよかった。

若い竹は短かいが、人によって、若い竹棹を使ったり、コワイ竹（一年から二年たった年数のたった古い竹だが、長さはある）を使ったりした。話者は父（初蔵氏）の頃から葉が二段から三段ついた比較的若い竹を選んで使ってきたという。

また、ボウチョウ（漁）は眼が良くないといけないが、父親（初蔵氏）はとても眼の良い人であったという。そのため、四斗樽に二杯も磯魚を突いてくる時があり、ボウチョウ（漁）では城ヶ島で父親の右に出る人はいなかったという。

城ヶ島に竹を植えたのは誰れであるかわからないが、大正十四年六月十三日生まれの話者（池田与七氏）が小学

生の頃に植えられたというから昭和初年ということになる。移植したのは、竹の根をもらってきた、自分より二十歳も年上の人であったという。また、話者が小学校を卒業する頃に竹は生えていたという。

その後、城ヶ島の竹は西へ西へとのびて増え、それを切ってボウチョウの棹（竿・柄）に用いることができるようになり、竹棹（竿）に不自由しなくなったという。竹の長さも四尋ぐらいの棹（竿）は島内でまかなえる。

また、別の話者（加藤治彦氏）によれば、ボウチョウをおこなう際、竹棹（竿）が軽くて、浮力で浮いてしまうことがあるので、竹の節をぬき、中に浜砂を入れて、ある程度の重さをもたせないといけないという。海中で使用してみて、竹棹が浮力をもち、思うようにあやつれない。「竹棹が浮いてしまう」ときには砂を入れ、重さをつけて調整した。

竹の中に入れる砂はどこの浜のものでも良いというものではなく、城ヶ島においては、島の裏側（太平洋に面した）赤羽根海岸にある砂が最も良いとされた。その理由は、赤羽根海岸の砂は鉄分を多く含んでいるから重量があるためだという。

赤羽根海岸の砂には鉄分が多く、良質の「砂鉄」なので、貝殻などがまじっていないため黒々とした色をしている。また、話者によれば、良質の砂鉄である証しには、地元の人々が、夏季に赤羽根海岸の近くでモグリ（裸潜水漁）をおこない、アワビなどを採取したあと、寒くなって岡にあがり、砂浜の焚火で採煖している際、焚火の周囲に立って、砂の上にいると、足の裏ばかりが熱くて立っていられないという。それは鉄分が多く、太陽光線で熱せられているためだと聞いた。

話者の池田与七氏によれば、「ヒジキ」（刈り）は「ヨイソ」でおこなっていたという。

明治・大正から昭和時代にかけて「ヨイソ」といい、十二月頃から夜間に汐が引きはじめる季節にあわせて岩場に出かけ、ヒジキ取り（刈り）をおこなった。夜間の岩場での作業のため、危険をともなうため、年寄りはあまり参加しなかったが、そのほかの、ほとんどの島民は出かけた。

昭和十二年二月一日に城ヶ島で大火があり、島内にあった常光寺も本堂が焼失してしまった。そのため、島民が寺を再建するための費用を捻出するために、こぞって「ヨイソ」に出かけ、ヒジキ刈りをおこなって資金を積立てた。調査当時はヒジキ刈りは四月頃、あたたかくなって採取していた。

ボウチョウ（漁）のうちでも磯魚を突くには技術的に熟練していなければならないが、あわせて魚の習性を熟知していなければ、多くの漁獲は望めない。

メバルは二匹、三匹と集まって上を向いている。他の魚が一緒にいる場合など、最初にメバルをねらって突かないと逃げられてしまい、突けない。メバルはかしこい魚だという。したがってメバルを一キロも突くことはめったにない。

メバル、カワハギは秋口や冬場にもいるが秋口には浅い方（アサミ）にあがってくるが、冬場になると深い方へ行ってしまう。

イシダイは春先になると、子どもを持つので浅い方（アサミ）にあがってくる。

スズキは子どもをもつと、東京湾からおちてくる。十一月はじめ頃からぽつぽつおちはじめ、十二月いっぱいで

終るので、その時期をねらう。

タコは一年中、捕獲対象になった。

ナマコは話者が若い頃（昭和の初期頃）は捕獲しなかったという。またトコブシなどは採取すれば一日に七キロないし八キロも採取できたが商品価値がなかった。

ヒラメはヒラマにいるのを突く。冬場になるとヒラメだけを専門に突きに出かけた。深さ十二尋から十三尋、さらに深い場所では十四尋から十五尋の深さのヒラメを突いた。冬になると潮が澄むので深い場所でもボウチョウ（漁）はできた。「オトシ」とよばれる「フンドンブシ」または「フンドンモリ」を使った（前述）。フンドンブシを吊す紐を四本に「オリッテ」おく（四つおりにしておく）と紐がまわらないで海底に達する。

昭和の初期にはヤリイカが冬の季節になるときたので、冬の夜の漁としヤリイカ釣りをしたことがあった。また、ヤリイカはゴトアミ（網）を使って捕獲した。

漁獲物の処理について聞くと、三崎にカエンマル、ヤマヤなどの仲買人がいたので、漁の帰りに三崎によって、仲買人に売ったという。また終戦後（昭和二十年以後）は城ヶ島にも鮮魚仲買が二人いたので、そこに売り渡したという。

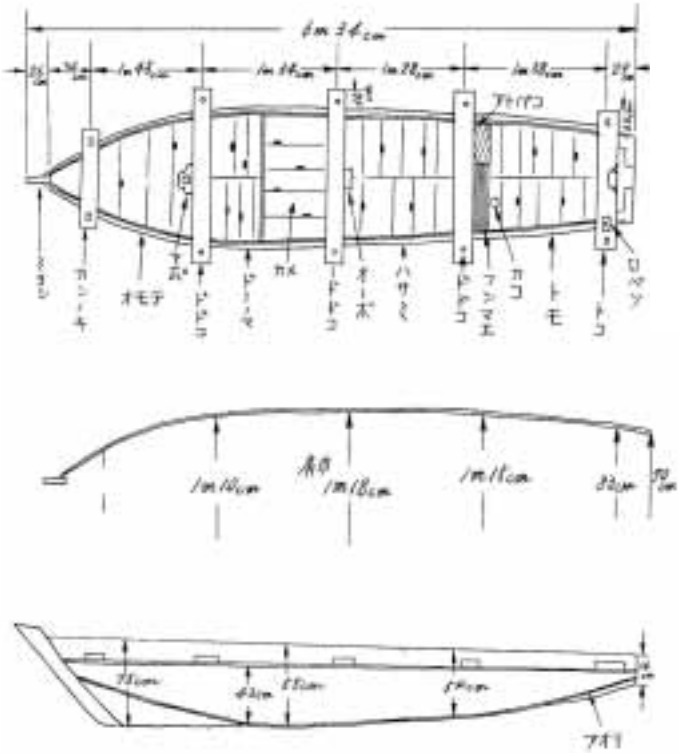
それでも、仲買人の定休日（公休日）などに出漁した日は、漁獲物を売ることができないので自宅に持ち帰り、自分の家で氷に入れて翌日までもたせて売ったこともあったと聞いた。

（八）ボウチョウブネ（漁船）と漁具

ボウチョウ（漁）に使用する漁船は、城ヶ島における木造和船としては最も小型のぶるいにはいる。この船は、夏季のモグリ（裸潜水漁）で使用される場合には「モグリブネ」の名で呼ばれるが、そのちがいは「ハサミ」の部分にモグリが採煖するための「ヒドコ」（火床）を設けるだけのちがいにすぎない。

本稿では城ヶ島のボウチョウブネ（舫舟船）の図を示すにとどめるが、詳細については、柮稿『漁船の総合的研究』―三浦半島における民俗資

城ヶ島のボウチョウブネ（舫舟船）



料としての漁船を中心に――[注(4)]を参照されたい。

（九）まとめ

この資料調査は昭和四十五年に実施した「城ヶ島漁撈習俗調査」が基盤（母体）になっている。

その際、当時在住の話者・青木広吉氏（明治二十一年九月十日生）・池田熊吉氏（明治二十五年十月十七日生）・池田新三郎氏（大正十年八月十日生）・石橋七三郎氏（明治三十年七月十三日生）・石橋敏蔵氏（大正十四年三月二日生）・青木倉吉氏（大正十三年七月一日生）・金子三吉氏（大正五年十一月十七日生）・金子庄八氏（明治二十七年二月二十五日生）の各氏をはじめ大勢の島の方々から聞取りの調査をさせていただいた。

また今回、本稿をまとめるにあたり、特に城ヶ島で伝統的な「見突き漁」（ボウチョウ・舫舡）を三代にわたっておこなってきた池田与七氏（大正十四年六月十三日生）には平成十五年（二〇〇三）二月十八日・十九日の二日間にわたり聞取り調査をさせていただいたことで、これまでの調査結果を補填することができた。あわせて藤田留吉氏ならびに加藤治彦氏のご協力もたまわった。

調査地の城ヶ島における漁撈活動は、基本的に夏季のモグリ（裸潜水漁）と冬季のボウチョウで成りたってきた。毎年、「二月から三月になると潮がくらんでくる」と地元で表現されるように、海水温が上昇しはじめると潮が濁りだすのでボウチョウをやめモグリ（漁）をはじめ、また秋口になって寒くなり、あわせて潮が澄みはじめるとボ

ウチョウ（漁）をはじめるという伝統的な漁撈方法の組み合わせが島民の生業の基本であった。

それ故、わが国における磯漁業の典型を示す地域として重要な位置をしめており、「磯漁伝統の研究」をおこなうために欠くことのできない地域であるといえる。

なお、末筆ながら話者の皆様をはじめ、城ヶ島漁業協同組合、三浦市教育委員会の関係各位に謝意を表するしだいである。

注

（1）田辺　悟『城ヶ島漁撈習俗調査報告書』　三浦市教育委員会刊　一九七一年

田辺　悟「城ヶ島漁村の成立過程と人口の変遷に関する歴史的考察」　三浦市立三崎中学校　一九六八年

三浦市教育委員会『海辺の暮らし』（城ヶ島民俗誌）　三浦市民俗シリーズ（Ⅱ）　三浦市教育委員会　一九八六年

三浦市教育委員会編『城ヶ島村沿革畧誌』　三浦市民俗シリーズ（Ⅸ）　三浦市教育委員会　一九九三年

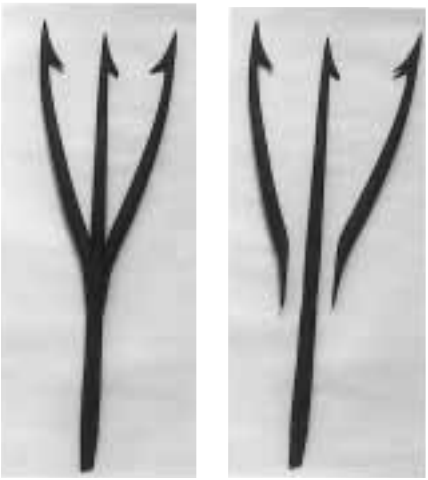
（2）内海延吉『海鳥のなげき』　一五四頁―五頁　いさな書房　一九六〇年

（3）前掲書『海辺の暮らし』（城ヶ島民俗誌）　十六頁―二十一頁―四頁

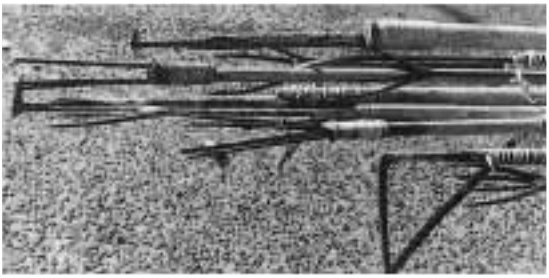
（4）田辺　悟『漁船の総合的研究』―三浦半島における民俗資料としての漁船を中心―　横須賀市博物館研究報告（人文科学）横須賀市博物館　第十七号・一九七四　第十八号・一九七五

（たなべ　さとる　本学教授）

ハコメガネ
サワラ材高さ(深さ) 33㎝
ガラスの直径 33㎝
上部の直径 23㎝



フンドンブシ（バラブシ）



ボウチョウ漁具
上から
コゾ・サザエブシ
オオコゾ・ヤス(フシ)
ワカメガマなど

ボウチョウブネ
（舫舫船）
全長 6 m34㎝
肩幅 1 m18㎝